



紀ノ川
助左衛門四代記
非 色
華岡青洲の妻
地 唄
江口の里
墨

吉佐和子集

新潮日本文学

57

© Sawako Ariyoshi, Printed in Japan 1968

口絵写真撮影 小島啓佑

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通居係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

定価 2300円

有吉佐和子集 新潮日本文学 57

昭和四十三年十一月十二日 発行
昭和五十六年十一月二十日 十刷

著者 有吉佐和子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 (〇三) 二六六一五一

編集部 (〇三) 二六六一五四

振替 東京 四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本 新宿加藤製本

本文用紙 三菱製紙株式会社

扉・見返・カバー用紙 特種製紙株

式会社 表紙クロス 日本クロス

工業株式会社 函用紙 日清紡績

株式会社 製函 文京紙器株式会社

目次

紀ノ川

助左衛門四代記

非色

華岡青洲の妻

*

地唄

江口の里

墨

解説
年譜

戸板康二

5

160

338

547

650

672

689

714

727

有吉佐和子集

紀ノ川

第一部

今年七十六歳になる豊乃^{よしのぶ}は、花^{はな}の手をひいて石段を一步、ふみしめるように上って行つた。三日前から呼びよせてある和歌山市の髪結女の手で、彼女の白髪^{はくはつ}も久々で結いあげられていた。小さく鬢^{はな}を張り、髻^{うぶ}もその齡^{だけ}には珍しく大きく出ている。若い頃の黒髪^{くろかみ}はさぞ見事^{めづらし}だったろうと偲^{おも}ばれるほど、白くなつた今も髪は多くて艶^{つや}を失つていないのだつた。小紋の重ね着という盛装で孫娘と手をつなげば、石段を上るにも手をひかれる齡^{だけ}が逆に花の手をひいてゐるように見えるのである。それは紀本^{きほん}の大御^{おほみ}っさんと呼ばれる貫禄^{くわんろく}というものであり、花が紀本家を出る今日、豊乃に何かの決意があるからでもあつた。

早春の九度山は、朝靄^{あさぐさ}に包まれていた。花は左手に祖母

の強い力を感じながら黙つて石段を上りきつた。髪は高島田に艶やかに結いあげ、濃く白粉を刷^はいた顔は心もち上氣して匂^{にお}うようであつた。縮緬^{しゆくめん}の振袖は明るい紫で、胸許に宮迫^{みやせき}の飾りかんざしが長いびらびらを振りあわせて鳴つてゐる。その小さな音が聞えるほど、花も緊張しているのであつた。生れて二十年育つた家から、他家へ縁づけば花はもう紀本家の者ではない。豊乃の掌は孫にそう教えようとして、それを強く惜しむ祖母の心をも同時に伝えていた。慈尊院^{じそんいん}の住職は、前日から聞いていたので弥勒堂の前に立つて出迎えたが、これはあらたまつた装^{まつ}ではなかつた。御経^{ごけい}をあげて頂くのではないからという断わりが前もつて来ていたのである。彼は大檀家^{だいだんか}の大御^{おほみ}っさんに丁寧^{ていねい}に頭を下げると、

「今日はお芽出とうさんでございます」

まず祝儀を述べた。

「おおきに有難うございます。えらい早うにから伺いまして、ご免なしてよし」

豊乃は鄭重に礼を返した。住職は拝堂をあげてあるから、御用があれば手を叩いてお知らせ下さいと云いおくと、北側の庫裡に姿を消した。孫と二人だけにしてほしいという伝言を承知してゐたからである。

豊乃は僧を見送つてから、ゆつくりと孫娘を振り返つた。かなり上背のある花を見上げて豊乃は満足げに肯き、弘法大師の御母公を祀^{まつ}る靈廟^{れいぼう}弥勒堂の前に伴つて行つた。

「高野山にはの、女は入れえへんがのう、この慈尊院までは上れるんやしてよし。そやよってに、こは女人高野と云うんやして。花は知ってたわの」

「はい」

「祈親上人さんちゅう偉いお方の夢枕にお大師さんが願われなして、我に十度礼せんよりは我が母に九度拜せよとしやったんは知ってたかのう」

「はつきりとは知りませなんだよし」

「お大師さんがほいだけお母さんを敬われたと知れば、女ちゅうたかて阿呆やつてええ筈なと思わんならんわの」

「そうでございますのし」

豊乃は静かに合掌して眼を閉じた。花も倣って手を合わせた。が、廟の前の柱にぶら下っている数々の乳房形に気がつく、しばらく瞑目することを忘れていた。それは羽二重で丸く綿をくるみ、中央を乳首のように絞あげたもので、大師の母公と弥勒菩薩を祀る靈廟に捧げて安座、授乳、育児を願う乳房の民間信仰であった。実物大の大きさのものから径一寸ほどの雛型まで、柱の上の方に沢山吊り下げられてある。まっ白な新しいものが二つ三つある他は、どれも雨風にうたれて古び黝ずんでいた。幼い頃から見慣れていたものなのに、この日殊更のように花がそれに眼を奪われたというのは、花の母親が花を身ごもったときそうしたように、豊乃も何十年の昔に花の父親を産むときそうしたように、花自身もまた近い将来そうするであろう

と考えたからである。市の和歌山高等女学校で女大学を学んだ花は、結婚の意義と女の役目の一つは子を産み家系を保つことにあると信じていた。産後の肥立ち悪く逝った母親に替って花を育てた豊乃が、孫娘が嫁ぐ日二人きりで慈尊院に参ろうとした理由が分るような気がして、花は静かに瞑目した。まだ処女でいる彼女に、今この廟の前で願う言葉はなく、傍の豊乃に心を併せようとだけしていたのである。

「お住さんがあない云うておくれやったよって、あちへ上らして貰おかいの」

「はい」

豊乃と花は開け放たれた拜堂に上って、祭壇の前の畳に坐って再び合掌した。右壇には弘法大師の御影が、左壇には御母公の御影が飾られてある。ともに大師の直筆と伝えられている。高野山に籠った大師が池水に自らの姿を映して描いた自画像と、御母公逝いて後弥勒菩薩になられた霊夢を見て追孝菩提のために描かれた曼陀羅である。この由来を、花は慈尊院の住職からでなく、花の殆ど総ての知識がそうであるように、豊乃の口からきかされていた。

「もうの、何を云うこともないけどの」

ここでは形式的に拝礼した豊乃は、花を省みると咬くように小さい声で云った。

「妹だけは大事にしなさいや」

「はい」

「遠おい処へ嫁くんやよつて、私もあんなの顔をちよいちよい見せて貰えんと覚悟してるんよし。何を云うことも無いでも、こないして二人だけになりとうての、一緒に来てもうたんえ」

この朝から、豊乃の言葉遣いは日頃と違つて優雅で鄭重なものに變つていた。聞きようでは他人行儀とも聞え、早くも花を他家の人と見倣しているかとも思われたが、盲愛してきた孫を手放す豊乃の寂しさとも聞きとれた。黙つて見詰めている祖母の視線を額に感じながら、花も黙つてそれを受止めていた。

幼い頃から花を、片時も傍から離すまいとしていた祖母の愛情は強烈であつた。紀本の大御っさんは、息子の信貴さんも孫の雅貴さんも氣に入らんとからに、孫娘の嬢さんだけ可愛がつてなざる。あの分や婿とつて分家させる心算や分らんで、などと噂されていた。雅貴と同じようにその妹の花を和歌山市に数年住まわせて、そのころの女には珍しい高い教育を受けさせたときも、豊乃と一緒に花と暮すために不馴れな町住いをしたものである。大御っさんはやっぱ嬢さんに婿とる氣や、ほや無うてなんであない女学者のよな学問させるもんでよ、と云われたものだ。自分が家つき娘で婿とつたよつて、嬢さんにもそないさせるつもりやろかい、いづれ三国一の婿さん迎える氣やろかい、なせ紀本の嬢さんは器量よしで利発で云うとこのない人柄やけの、と誰かが肯いていた。事実、豊乃自身その氣が十

分あつたようである。若く死んだ花の母親水尾が、姑である豊乃に氣をかねて小さくなつて暮していたのを彼女は覚えていた。花に水尾の真似はさせたくない。一人娘に生れて育つた豊乃は、自分が受けたような教育を花にほどこすことによつて、花を豊かに成長させたいと願つたのだ。紀州の名家である紀本の家系が、その名のとおり花によつて花ひらいたと思えるように、花は美貌を備えていた。そして豊乃の願望に應えて賢く育つていた。茶の湯も奥儀を極め、書を能くし、筆も免状をとり、豊乃の躰に言葉遣いも礼儀も正しい分別を心得ている。家柄に加えて、右の通りならば、もう付け足すべきものはなかった。紀本家のある九度山村、隣接する慈尊院村以下、元官省府ノ荘内の村から降るように縁談があつたのは当然である。

だが、どれにも豊乃は首を横に振つた。彼女の口から花に婿をとつて分家させるという言葉は出なかつたが、縁談のある度に豊乃は何かと難辯をつけて退けたのである。主な口実は、望む家の格が低いということであつた。高野山政所のある慈尊院村の旧家である大沢家から次男の嫁にと望まれたときは、豊乃の妹が嫁入つた先だから従兄弟の子供同士で血が濃すぎると、理由にならぬ理由を云いたてて反対した。紀本家の当主である信貴は、温厚な人柄で孝心篤く、豊乃に完全に押えられている形なのだった。豊乃の反対を押しきる強氣はなく、では花に婿をとるのかと訊き返すのも控えていた。

紀州 紀ノ国 木は多て
嫁をとるなら 花咲かしよ
九度山一番 紀本の娘

こんな穠つき唄が歌われていた。節は前からあったし、文句も大体昔から伝わっていたものを最後だけそのときで変える習慣があり、子守唄がわりにもつかわれていた。豊乃が娘のころは伊都郡もずっと東の大和に隣接する隅田ノ荘に美女がいたらしく、嫁をとるなら花咲かしよ、隅田ノ荘一番さかえさん、と歌われていたものである。さかえというのは美しいと云われている娘の名前であった。勝気で我儘に育った豊乃は、この見たこともない娘に嫉妬を覚えたものだ。豊乃もかなりな美貌だったのだが、隅田ノ荘のさかえを退けるほどには美しくなかったらしい。

その昔の口惜しさを孫娘が取返したのだ。豊乃が花にかけた願いは大きかった。徳川さんから貰いにきやれても滅多には渡さんぞという強気であったが、実際にはどうするのか彼女自身も方針はたてることができぬままで花を溺愛していたようだ。その内に穠つき唄は九度山のあたりだけでなく伊都郡全体に広まっていた。

明治三十年、花が二十の誕生日を迎えるころ、いつとき下火になっていた縁談が二つ同時に起った。

一つは昔隅田ノ荘を領していて、今は豪族として名家に

数えられている隅田家の新家から紀本の遠い縁戚に当る丹生家を通しての申込みである。隅田ノ荘のさかえさんは美しくて家柄の娘ではなく、隅田家に仕える小者の女になったが、花は隅田一族から迎えられたのだ。

「もう花も婚期に晩いというても決して早いとは云えん齡ですよって、お母さんも賛成しておくれなして」

と信貴は慎重に、しかしこの度はかなり高圧的に豊乃の意向を訊した。十四、五歳で嫁入りしても世間是不思議と思わぬ時に、十八の盛りをすぎれば花の年齢は親にとって不安を感じさせるのであった。もう強情は張らせない、豊乃の愛情で花を不幸にするわけにはいかないのだと言外に意味は強かった。

だが、豊乃は反対したのだ。

「隅田はんには花はやれまへんな」

「なんでです」

「なんでで考えておみ。紀ノ川は東から西へ流れてるわの。紀本から隅田へ行たら西から東で流れに逆らうちゅうもんや。紀ノ川沿いの嫁入りは、流れに逆らうてはならんのやえ。花は隅田はんにはやりまへん」

「そんな阿漕おしやったら困りますすな」

「阿漕やないえ。私のお母さんは吉野からこの家に来なした。あんたらのお母さんは大和から嫁入りしてきたんえ。みんな流れに沿うて来たんや。自然に逆らうのは何よりい

かんこっちゃ」

「そんなこと云うて、いつまで花を嫁にやらなんだら先行きどないなことになりますんや。それは考えていなさるのか」

「ああ、考えてますわいな。花は真谷へ嫁にやるんよし」
 すらりと云い捨てられて、信貴は黙然としていた。紀ノ川のずっと下流にある海草郡の有功村字六十谷の真谷家からも、隅田家と同時に花を貰いたいと、これは竜門の北家を通して申込んできていたのだ。

紀本の嬢さんは六十谷へ嫁にいくんやとし。噂は数日を経ず近隣一帯の村々に知れ渡った。六十谷へ、なんでやね、と不思議そうな顔をする者たちがいた。紀ノ川に限らず河上に棲む者たちには上に居るといふ矜持があったのである。海草郡は、紀ノ川の下流もかなりの下にある在所であつた。村の格から云つても官省府ノ莊九度山とは段違ひに下る。まあ真谷家は六十谷で一番の名家であり、本家の後つぎの嫁に望んできたのだから、家柄に難のつけようはないが、それにしても紀本の嬢さんが興入れる相手ではないと誰もが思つたのである。

信貴も紀本家の当主として豊乃に反対すべき義務があつた。

「そらお母さん、無茶いうもんですわ。隅田はん断わるのと真谷へ嫁にやるのと話は別になしてよ」

「あたりまえよし。隅田はんに関係なく花は真谷へ縁づけらんやして」

「ほな別々で考えまひよな。真谷はんやつたら、これまでの縁談断わりなしたと同じ理由で断わらななりまへん」

「なんでよし」

「家の格が、ずいと低いやおませんか」

「なんでよし」

「なんでよしして、九度山と六十谷と較べただけでも分りますがな」

「信貴さん、あんたも若いに古いこと云うわして」

紀本家は親も男子をさんづけで呼ぶ習慣があつた。豊乃は息子古いときめつけ、花を嫁にやる相手は家の格ではない、男だ、と云い切つたのである。

「息子も娘も和歌山市に住まわせて教育受けさせたあんたが、真谷の敬策さんの名知らなんだとは情けないの、東京の専門学校出なして早うにから太兵衛はん助けて村役場の助役やつてなざつた。二十四の今で、早や村長さんや。紀ノ川沿いを見渡して、この伊都郡にも隣の那賀郡にも、これだけの婿さんはいてえへん。家柄やの家の格やのは大黒柱の男あつてのことやしてよし」

こう云われてみれば、信貴には一言もなかつた。彼も九度山村の村長を勤めていたから、真谷敬策の名前は新進気鋭として聞き知っていた。が、どうであれ信貴としては隅田一族を親類とする方が一カ村の村長にすぎぬ真谷敬策を婿にするよりは好ましいと思われた。豊乃に対して温順であつた信貴は、この事に関して珍しく母親の言葉の前で楯

をついた。

「川下から上へ嫁入るのが流れに逆ろて悪いんやったら、川向うへ嫁入らせるのも水で縁切るちゆうて悪いと云いますやろ。新家が妙寺から嫁もろて、えらいことになったしてよし」

豊乃の叔父が紀本の新家をたてて、その息子に川向うから嫁をとった途端、家運が衰え一家悉く死に絶えた話を例にとつて、信貴は喰ひ下つたのだが、

「そら妙寺から九度山へ嫁に來たよつてあかなんだのや。万葉にある妹背山の歌を信貴さんも知つていよ、背山は加勢田ノ莊にある。その向いっ側に妹山がある。いうたら紀ノ川の此方は女で彼方が男や。新家は逆やつたよつてにないなことになつたけどの、妹山のある岸から背山へ嫁げば、なな障りがあるもんで、え」

理屈は豊乃が一枚達者であつた。いや、理屈の筋は通らずとも豊乃は相手を屈服させずには措かない女だつた。

文政五年生れの豊乃は、何かというとき明治維新を持ち出すのが口癖だつたが、このときも最後はそれが出て、

「世の中は封建制度から郡県制度に變つたんやしてよし。女が他処に出るに、ななるさいことがあるもんで、え」と結んだ。

信貴はそれでも諦めきれずに秘かに花を呼んで、直接娘の希望を訊したが、昼にのの字を書くような不健康な教育を受けていなかった花は、つぶらな眼で父親を見詰めたま

ま、

「隅田よか六十谷の方が和歌山市に近うございますのし、私は真谷さんへ嫁きとおます」

と答えたものである。

花の付人である徳からこの情報を得たとき、豊乃は天井を向いて、ふおッ、ふおッと腹の底から嘖き上げるように笑つた。和歌山市で過した数年間が花にとつて無駄でなかつたことが嬉しいのであつた。真谷敬策の名を、花も知つていたのに違いないと豊乃は知つて、自分の孫だと満足していた。

こうして、女方が強く望んで真谷家の申込みを享けたのであつたが、結納を交わしてから二年近い歳月が結婚の準備として予定されねばならなかつた。豊乃は花と徳を連れて京都へ出かけ、嫁入道具をあつらえ、襦袢も帯も振袖も念を入れて注文した。京塗りも手間を省かぬ上等の品は、地塗りから仕上りまでに一年余りかかるのである。塗簞簞、箏、鏡台、間簞笥、塗りの質から蒔絵の図柄まで細かく豊乃は指図した後、茶は裏千家、花は古流の家元へ、花を連れて挨拶に廻つた。それまで万事に地味で、家計を締める立場にいた豊乃の人が變つたような派手な振舞に、信貴は呆然として、娘三人持てば家が持たんちゆうな、ほんまやなあと嘆息した。家つき娘であつた豊乃は、孫娘の嫁入りを自分の分も重ねて盛大なものにしようと思論んでいたのである。

「花と一緒に暮すのもこれぎりや」

と云うのが口癖になつて、京都の滞在も三月の余になり、名利、庭園を毎日見て歩いた。竜安寺のつくばいで、見事な紅葉を見たときは、感嘆しながら花を振返つて、

「結構なもん見さして貰うたえ」

と喜びを感謝で表現する豊乃であつた。

「私の勝手で婿さんを待たしてしもた。二年待たせた私も私やが、文句云わんと待つておくれた敬策はんは、私が見込んだ通りの大物やつたらし。花も安心して嫁きや」

豊乃はしみじみと云うのであつた。花を嫁にやるときめてから二度の豊かな秋を過して、彼女はもう思い残すことはないと自分に云いきかせているのもあつた。

「はい」

花は、両手を仕えて頭を下げた。高く結った島田の鬘を、豊乃はしばらく眩しいように見詰め、やがて顔を上げた花の衿もとを正してやりながら、

「ほんまに、可愛らし」

呟く豊乃の眼は潤んでゐる。花も眼のふちに涙を湛えて息をつめていた。

何を云うこともないのだと豊乃は云い、その通り何も云わなかったのに、豊乃が生きた歳月と花の年齢とが完全に結びあわされてゐた。紀本家を永遠に離れて、豊乃とは一つ墓に入ることもなくなった花が、家の絆を離れて女で祖母に結びあつたのである。

朝靄は晴れかけて、薄く朝日が射し始めていた。

「見、紀ノ川の色かいの」

青磁色の揺らめきが、拜堂を出て東の石段へ戻りかけた二人の眼の前に横たわつてゐた。

「美つついのし」

花は思わず口に出して感嘆した。

「美つついのう」

豊乃は花の言葉を反芻して、花の左手を握りしめた。慈尊院の石段を手を繋ぎあつたまま降りてきた二人を、待つてゐた人々がとり囲んだ。船出の用意は整えられてゐる。九度山村と慈尊院村は給出で見送りに来てゐた。

髪結いの崎が花に駆けよつて櫓を出して髪をなでつけた。徳は先に立つて渡し場の手前に置かれた駕籠の戸を開けた。人力車という便利なものができてゐたが、家格を守つて花の嫁入りは塗駕籠が用いられるのである。

「ほんなら、おめでとう」

あらたまつて豊乃は花に声をかけた。花は声もなく深く頭を下げると、振袖を抱いて駕籠に乗った。徳が市松人形を花の膝にそつと置いた。人形を抱いて嫁入りするのは、このあたりの慣習である。

和歌山市から雇われてきた駕籠かきが二人、調子をとつて花の乗つた駕籠をかきあげると、渡し場につけた舟に乗りこんで中央に据え、櫓に退いた。

「可愛らしかったわの」

「ほんま、人形さんのよやったわ」

こう口々に囁きがきかれる中を、船頭たちが、

「ええかあ」

「ええでえ」

と大声で呼応しあい、花をのせた舟は岸を離れた。先頭の舟には仲人夫婦が結納返しや親類縁者への土産ものを満載して鴛鴦のように並んで坐っていた。花のいる駕籠をのせた舟は二艘目である。徳がそれに付添ってのっている。塗りなれぬ白粉を塗って、この五十近い女の顔は緊張していた。温暖の土地とはいえ三月初旬の早朝の空気は、殊に川の上とて肌を刺す冷たさがあった。紬の紋服に帶つきという装では、女衆たちは寒すぎたかもしれない。

三艘目と四艘目の舟には信貴と花の兄である雅貴と、丹生家の本家新家等々、紀本家の親類縁者が乗りこみ、これは岸を離れると直ぐに賑やかな世間話に打ち興じている。最後の舟には髪結の崎を別として紀本家の男衆と女衆が膝を詰めあって乗りこんでいた。

「豪勢なものやのう、信貴さんよ。明治維新この方この辺りで、このかい立派な嫁入りはあるまいかい」

「見い、川筋は人だかりや。なんせ荷は九吊り、堤づたいに運んだあとで、紀本の嫁入りは鳴り響いたある」

信貴も古い分家の老人たちからそやされて悪い気持になる筈はなかった。前夜、よっぴて飲み続けた酒の酔いは、この朝まで持ちこしていて、彼の顔は日頃一倍赫らんで

いたが、それを笑み展げて、

「ま、こいで九度山の紀本を人は忘れんといてくれましょうかい」

こんなとぼけた口を利く上機嫌だった。

碧く静かな紀ノ川だが、流れは決して遅い方ではない。五艘の舟は船頭たちのさす棹を待たずに滑るように水の上を走っていた。人々がいうように、兩岸には一行を見送る里人の姿が見られた。人力車で列を組む嫁入りはもう珍しくない頃に、舟を五艘も連ねて、しかも花嫁御寮は駕籠の中にいるという時代があった嫁入りは誰の眼を瞠らせるにも十分だったのだ。

「お徳さん」

駕籠の中の声に、徳が傍へ寄ると、

「戸あけて頂かして」

花は小さな声でいうのである。

徳は自分の迂濶を悔んで、急いで外から手伝って塗駕籠の戸に隙間をあけた。渡し口で豊乃がのびあがつて舟を見送っていたときに気がつけばよかったと、徳は二人の主にすまなく思った。

「これでよろしゅうございますかのし」

「おおきに」

花は二寸ばかりの隙間から、紀ノ川南岸の萌え出たばかりの新しい緑を見て、それまで忘れていた呼吸を取戻すことができた。小窓は開いていたが蔑（はず）りて視界が鬱（ふさ）し

ったのである。祖母が見送っていた姿は小さな視野からは早く消えていた。それから後は身を固くしたままで、水の上にいる自分の位置を感じていただけである。

膝の上の市松人形は、羽二重の熨斗目を羽織と対で着て、角帯をしめ白足袋をはき、人間と同じ念入りの装いで、花の顔を眼を瞠って眺めている。白い肌が艶やかで紅い唇は心持ち受け口で、どこかおしやまな子供の顔であった。抱き起して羽織の紋をあらためると、それは横木瓜で真谷家の定紋であった。男児の人形を抱いて嫁入りするのは、嫁しては子を儲けて一家の繁栄をはかるという女の心得を示すものである。花は人形を抱きしめて、真谷家の御っさんになって自分はどんな子供を産むのだろうかと考えた。幾度も縁談を断わる度に豊乃が、子を産むのは女やよつてにの、と花の顔を見たのを思い出す。子を産ませる男なら選ばねばならぬという意味だったろうか。真谷敬策について、家同士に定めた縁組で当人同士はたった一度、二年前に顔を合わしただけであったが、花は彼女の祖母が見込んだ婿を、素直に一途に信じていた。豊乃の蔭で蠟梅の薔のように固く、花は敬策を憧憬し、やがてその思慕を殆ど絶対のように思い固めてしまっていた。舟の上の襦籠の中で、市松人形を抱きしめて、ようやく花は紀本家を出た自分というものを実感していた。

紀ノ川の南岸では、長い手をつけた青竹の籠を下げた洗濯女たちが、物々しく川下へ下って行く五艘の舟を指さし

て、口々に何かいつているようであった。

「あれは、笠田はんの迎えやないかの」

「ふん、見える、見える」

徳と駕籠かきの男たちが、北岸の笠田の渡し場に、法被姿で出迎えに来ている土地の旧家の男衆たちを認めて声をあげた。軽い食事と小用を足すために、寄る予定の内にあった処である。まだ陽は上りきっていない。

笠田の本家が川に近い新宅を開けて全員を迎える用意を整えていた。御っさんは花の美しさを褒めそやし、振袖の染めの見事に感嘆していた。

「四君子やのし。大御っさんのお見立てでございますか、まあ御趣味のええ」

薄茶を行儀よく啜ってから、花はそつと訊いてみた。

「兄山は此処から見えますかのし」

「ええ」

御っさんは怪訝そうに訊き返し、花から加勢田ノ荘には背山とも呼ばれる山がある筈だと説明されて、

「成高峰のことやろかの」

と曖昧な口をきいた。

「いえ、もっと小さい山のようにございますよし」

笠田の御っさんは、それを聞き流して誰かに問い訊す労はとってくれなかった。花も嫁入り道中で口数を多くきくことは慎まねばならぬ場合と思ひ、それ以上は追わなかったが残念でならなかった。笠田家も格の低くない家なのだ

が、紀本家のように女子供にまで学問の氣は漲^{みな}っていないやうである。万葉集や古今集を講釈して妹背山の故事をひいて笠田の御っさんに説明するような真似は花には出来ない。ただ残念であつた。祖母の豊乃と離れたことを、花は痛いように感じていた。

屋には粉河^{こなが}について、ここでは児島家の饗応を受けて中食をとつた。西国巡礼三番の粉河寺を持つこの村は、全体に豊かさが黝^{くろ}ずんでいて、一行を抱えこんでも揺がなかつた。花はここで、晴れた南の空に形よく聳^{そび}える竜門山を見ることができた。紀州富士とも呼ばれるその山は、微かに雪を頂いて裾野は長くゆるやかに流れている。

「竜門さんが見えますのし」

お徳が仲人の御っさんにいうと、竜門の北家を背負つてるように思われたかと北夫人は上機嫌で、

「日本晴やしてよし」

といつた。

が、空には綿帽子のような薄雲があちこちに棚びいて、それは朝の冷たさに比べて既に春を思わせる穏やかな天気であつた。

更に下つて午後三時を廻つたころ岩出村^{いでむら}につくと、日清戦争後の経済変動で滅法景氣のよくなつた吉井家が待ち構えていた。九度山の紀本家から嫁入りの休息所を頼まれたことに、感激して土地をあげての歓待である。花は、豊乃が特に北岸の旧名家ばかりを選んだ意図までは考えなかつたが、紀ノ川が下へ下るほど土地の格は下つても景氣は上つて行く様子を感じないわけにはいかなかった。土地に氣風のあることも発見であつた。自分が嫁ぐ六十谷は、どんな氣風を湛^{たん}えて自分を待っていることだろう。

日が暮れかかると、紀本家の男衆たちは用意していた提灯^{ちてい}に火を点した。三巴の家紋が、五艘の舟を飾りたてた。有^い功村大字六十谷では、柳原の川べりに大勢が出迎えに出ていた。木瓜の紋提灯が、宵闇の中で躍り廻つていた。それが三巴と入り交ると同時に両家の男衆たちが歌い始める。

芽出た 芽出たの

若松さまよ

枝も栄える

葉も繁る

夜の道を、間のびのした調子で幾度も幾度も繰返しながら、花嫁行列は樋ノ口を廻つて揚^{あげ}の垣内にある真谷家へ繰りこんだ。すでに九吊りの嫁入道具を飾つて、受入れの用意は万端整っている真谷家では、塗襦籠から出た花を迎えようと直ぐに小部屋へ入れて、徳と崎に任せて花嫁姿の準備をさせた。市松人形は、表座敷の床の間に飾られた。

紋綸子の白無垢に同じ白の桶襦姿、着付けをすますと崎はほろっと溜息をついて、